

高橋華陽

柏崎順子

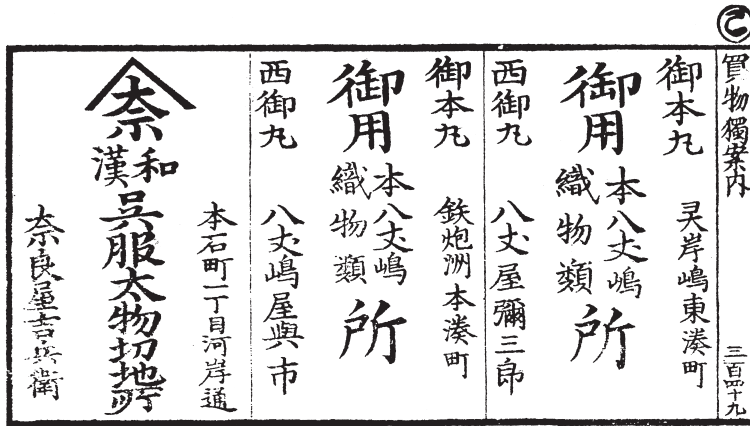
十八世紀の江戸に多くの町人学者が輩出し、しかもその実力が定評となっていたことを、以前、立原翠軒の門人岡野庄五郎宛書簡の紹介を通して述べたことがある⁽¹⁾。この翠軒書簡中に次のような件がある。

近来、町人ニ実学ノ人多ク成候。礼失求之野と申類ニて御座候当時の儒家と申ものハ空論詩文などニかかり候て、無用の事に成候て、却て町人ニ名物出来も奇成事ニ御座候静（静嘉堂文庫所蔵『小宮山楓軒叢書』所収「翠軒先生手簡」）

ここで翠軒がいう「実学」とはどのような学問のことをいっているのであろうか。文脈のなかでこの「実学」が、「当時の儒家」が道学性理を説く「空論」や「詩文」に泥んでいることと対置して説かれていること、その「実学」の徒として具体的に挙げられた人物、たとえば檜山坦斎や細井貞雄、狩谷棧斎といった人々の、この書簡が発せられた文政二年当時の業績を考えれば、翠軒がどのような学問を以て「実学」と称していたかは自ずと明らかである。檜山坦斎は著述に『武林拾葉』や『花押譜』、『皇朝名画拾彙』等の目録や図鑑類があり、細井貞雄は著述に諸書の記載を証拠として上古の姓の起源、沿革、尊卑の別に関しての解説書である『姓序考』がある。狩谷棧斎は当時出版されていた著述は無いが、文化十二年五月から行われていた漢籍古鈔本・古刊本の書誌学的研究会である求古楼展観が棧斎宅で行われていたこと等を勘案すると、翠軒がいう「実学」とは、証拠をひいて合理的・客観的に物事を明らかにする実証的な学問のことであると考えてよいであろう。翠軒はその他にも「実学」の町人学者として岸本由豆流、市野迷庵、小山田与清、石川雅望、北静廬の五人をあげて批評しているが、その顔ぶれをみてもこの解釈で矛盾ない。このような「実学」の学者が町人に多いことに一種の感慨を抱いている人物は翠軒に限ったことではない。備後神辺の詩人にして福山藩の儒官であった菅茶山は生涯二度出府しているが、その出府の際得た知遇に町人の学者が少なくなく、文政三年

某宛書簡には「つがるや市のや両三右衛門時々御逢被成候哉、いづれもおもしろき人物に候」としたためている。「つがるや」は津輕藩御用達の米屋狩谷棧齋、「市のや」は質商の市野迷庵である。書簡では棧齋が本好きなことにも注目しており、町人の学者に一目おいている茶山の姿勢をうかがうことができるのである⁽²⁾。また、「実学」という言葉が当時巷間でしきりに用いられていたらしいことは、例えば畑銀鶏の『南柯の夢』⁽³⁾に「文政年中に、池の端辺にこれに彷彿たるだけものあり。実学を唱へ、夫婦して異説を解く。其論、奇にすぎ抱腹絶倒いふにもたらぬ、大化ケ物なれども、ひとしきりは社中おびたしくふえ、門場市をなせり。げにやはくらんやみの薬は、はくらんやみがかひにくる、といふ諺の如し。事を解さざる好事のやから、訳もわからぬうちから弟子となりて、其の席に連なる事、あはれといふもありあり。先第一実学といへる名目は何事ぞや。儒学、医学、和学、仏学にいたるまで、実学ならずして何ぞや。実学と名をつくるときは、虚学といふもなくては叶はず。実は虚の反対なれば、いづれの学をさして虚学といはんや。」というくだりをみてもうかがわれる。この書は当時の書画会へ行き交う人々を批判した書であるが、引用の箇所はおそらく当時、実際に「実学」を唱え、人を集めるようなことが行われていたことをうかがわせるものである。一種の流行現象のように「実学」がもてはやされている様子がうかがわれるのである。しかしこの町人が中心の「実学」は実にさまざまなレベルのものが存在する。本稿はそうした「実学」を標榜する町人学者のひとりである高橋華陽についての報告である。

高橋華陽はこれまで中野三敏氏によってその存在が紹介され、沢田東江の周辺にあった人物であることが明らかにされている⁽⁴⁾。名閔慎、字正卿、通称与一、女護島または華陽と号した。書肆としては万寿堂与一あるいは八丈島屋与一と称して東江の書等を出版したほか、華陽自身も夥しい数の本を著して蔵板している。これまで町人であることは知られていたが、このたび幕府の御用達町人であることが判明した。文政二年に割印を受け、同七年出版の『江戸買物独案内』に「御本丸／西御丸 御用 本八丈島／織物類 所 鉄砲洲本湊町 八丈島屋与一」とあることに拠る（図版1）。文政二年初春の奥書をもつ写本『旧昔綜嶼むかし新話』（無窮会専門図書館所蔵）には「東海孤島名／産綜嶼織所／八丈島屋与一識」という識語があって、自ら八丈島の織物販売を行っていることを記している。さらに、華陽は両替商でもあったことが判明した。文政七年の奥書をもつ「三組番組両替屋仲間規定書」（複本一三井文庫所蔵）の両替屋下行事の連名のなかに「八丈島屋与一」の名を見出すことができる。嘉永七年刊『両替地名録』（国会図書館所蔵）を見ると、「三田組」



図版 1 『江戸買物独案内』(花咲一男編, 昭和四十九年, 渡辺書店)

のなかに「本湊町 家持 八丈島屋与一」という記載があって、華陽が銭両替から始まった三組両替屋のうちの三田組に属していたことが判明する。嘉永四年『諸問屋名前帳』(国立国会図書館所蔵, 旧幕引継文書の内)両替の部の「三田組」にも「八丈島屋与一」(本湊町/家持)とある。以上の資料から少なくとも文政七年には両替商だったことが確認できるが、商売を始めた当初から両替商も兼ねていたのか、晩年に両替商の株を取得したのかは判然としない。

この他、華陽の事跡の全体像を知り得る資料としては、その墓碑銘が伝えられている⁽⁵⁾。このことも中野氏によって既に指摘されているが、これまで具体的に内容が紹介されたことはない。以下に全文を引用する。

女護島高閔慎正卿墓

翁姓藤原, 氏高橋, 諱敏慎, 字正卿, 号女護島。考諱為榮, 取金川氏, 生五男二女四為。翁按家譜系出于大織冠鎌足公遠祖。左近将監頼之仕于源幕府食邑于三河高橋因氏焉。歴世有武切大永中, 左馬助頼元仕于北條氏世住相小田原北條氏滅遷居于下田子孫亦蕃或為農或為工。寛永中, 長左衛門長次, 為八丈島御船年寄。是為渡島之鼻祖子長恒遂移居。于島子孫因家焉為榮。君善繼父祖之業, 立積金之法。衆皆便之百姓蒙其澤者不少矣。好学而能劍術親親愛衆為家童訓。翁長兄榮貞君, 亦善繼, 善述, 官命為地方助成役賜祿, 許帶刀。翁以宝永三年三月五日生, 文政五年壬午歲十二月十三日疾而没, 壽七十一。葬于築地本願寺中。翁年十一出島, 十八奉考之遺命為商, 二十八志于学, 潜思聖学為考經中庸十数經為證, 遂唱證挾学。天明凶荒之時, 救飢民蒙官之褒章。文化十四年又褒

賞、賜圓銀十枚。因繼父兄之業、恵島民之事也。於乎翁好学不倦、懇篤愛人蓋其天性云。取松林氏生二男、皆就余而学焉長子原要建石請誌乃為銘曰

人之為学始於幼翁之志于学於中年志之懇篤何云早勉行之身施之家以刺子孫
文政六年歲在癸未夏四月朔 和氣行藏撰

撰者和氣行藏は江戸の儒者で、生前華陽が上梓した本に序文をよせるなど、学問の上で交流のあった人物である。

この墓碑銘によれば、華陽は藤原姓で、父の名は為榮。母は金川氏、兄弟は五男二女で、その第四子として生まれたという。宝永三年に生まれ、文政五年に没したとあるが、それでは享年が百十六歳ということになり信じがたい。そこで七十一歳で没したという記述を信じ、逆算すれば宝暦二年生まれということになる。宝永は宝暦の誤りではなかろうか。十一歳のときに江戸へ出て十八歳のときに亡父の遺命で商いの道に入ったとある。二十八歳で学問の道に入り、儒学に思いを潜め、ついに證拠学を掲げる。天明の飢饉の際には義捐して褒賞され、さらに文化十四年にも再度褒賞されたことが記されている。褒賞の理由は明らかされていないが、やはり義捐をしたのであろう。ちなみに文化三年、商人に御用金が課せられた際、御用金を納めた商人に褒美が下されたが、その商人の名と褒賞金の金額が石塚豊芥子の『街談文々集要』⁽⁶⁾に紹介されている。このなかに金千二百両を差し出し、褒賞金銀十枚を拝領した商人の名前のなかに「しまや与一」という人物がいる。住所は華陽と同じ本湊町である。「しまや与一」では「八丈」が欠落しているが、八丈島屋与一と住所も同一で、しかも拝領した褒賞金も墓碑銘でいうところと同額なのが気になる。あるいは二度目の褒賞というのはこの文化三年の御用金上納のことではないかとも思われる。いずれにしろ、同じ銀十枚の褒賞金を拝領した人物が上納したのが千二百両という金額である。華陽の富裕の様如何ほどかは想像に難くない。華陽の商売は前述の『江戸買物独案内』に明らかなように八丈島の特産品である織物を商っていた。八丈島は古くから都からの流人によってもたらされた絹織物の技術があり、江戸時代には、租税の上納品として、また將軍家御用品として大奥や大名家で用いられ、やがて町人にも広がって粹人に好まれたという。その八丈島の織物の代表格が黄八丈である。享保十二年上演の浄瑠璃『恋娘昔八丈』が題材としたいいわゆる白子屋事件の下手人お熊が市中引き回しの際、着用していたのが黄八丈だというのであるから、享保年間には黄八丈が既に町人に享受されるところとなっていたのであろう。しかし華陽は墓碑銘によれば、八丈島から江戸に出て新

たに商いを始めた創業者であることから、一代で富裕な商人となったものと考えられる。このことが華陽の旺盛な出版活動を経済的に支えたであろうことは容易に察せられるところである。

華陽の出版活動は、大別して書肆としての活動と自著の出版とに分類できる。

〈書肆としての出版活動〉

華陽の活動はまず書肆としての出版事業が確認できる。現時点で次の六点を確認している。

- 『文淵遺珠』明和二年酉十二月廿五日割印 板元売出 吉文字屋次郎兵衛
- 『三体文淵遺珠』天明三年卯十二月割印 板元売出 吉文字屋次郎兵衛
- 『臨池便覧』天明六年午極月廿五日割印 板元売出 須原屋茂兵衛
- 『文淵遺珠』寛政十二年申九月割印 再板 板元売出 須原屋茂兵衛
- 『文林摘葉』寛政十二年申八月割印 板元売出 須原屋茂兵衛
- 『続文淵遺珠』文化元年十二月廿三日割印 板元売出 須原屋茂兵衛

このうち『臨池便覧』は管見に入らなかったが、その他四点は確認することができた。

管見の限りでは明和三年春の『文淵遺珠』が華陽の書肆としての出版活動の嚆矢である。明和二年十二月に割印がなされているが、出版は翌明和三年春である。版本の後表紙見返しに「明和三年丙戌春／書林 二條通柳馬場西へ入ル町／丸屋市兵衛／江戸日本橋南通三町目／吉文字屋次郎兵衛／万寿堂与市／江戸日本橋南通一丁目／須原屋茂兵衛」という奥書が付されている。このうちの「万寿堂与市」が華陽である。『文淵遺珠』は版本が焼失でもしたものが寛政十二年に再刻されている。

『三体文淵遺珠』は『割印帳』に天明三年十二月に割印がなされ、板元売り出しが吉文字屋次郎兵衛になっている。かつて上梓した東江書で漢詩の用語を抽出した詩作の手引き書『文淵遺珠』の「五字」の部までを、東江の弟子芝田汝嶺が三書体で書いた本である。この本の奥付には二種類あって、第一種は「天明三年癸卯冬十二月／東都書肆 日本橋通三町目／吉文字屋次郎兵衛／吉文字屋茂八／万寿堂与市／佐脇庄兵衛刻字」、第二種は「天明三年癸卯冬十二月／東都書肆 日本橋通三町目／吉文字屋次郎兵衛／日本橋通一丁目／須原屋茂兵衛／八丈島屋与市／佐脇庄兵衛刻字」で、第二種は第一種の奥付の「吉文字屋茂八」と「万寿堂」を削って「日本橋通一丁目／須原屋茂兵衛」、「八丈島屋」と入木修整した奥付である。

再刻本『文淵遺珠』は、宝暦元年の井通熙の序も本文の内容も全く同一だが、行数が初刻本は八行、再刻本は九行である。匡郭の寸法はほぼ同じだが初刻本は天地がより広く、再刻本より大きな書型である。内容に異同はなく、改訂のための再刻ではない。何らかの理由で初刻本の版木が損傷し、新刻したものであろうか。再刻本『文淵遺珠』は、二種類の奥付が存在する。第一種は広告の後に「明和三年丙戌春開刻／寛政十二年庚申八月再版 京都 丸屋市兵衛／東都 万寿堂与市／須原屋茂兵衛」（学習院大学図書館所蔵）とするもの、第二種は「寛政十二年庚申八月 東都書林 八丈島屋与市／須原屋茂兵衛」（架蔵）とするものである。第二種の奥付が付された本は後印本と推定される。奥付に『臨池便覧』が追加されているからである。「八丈島屋」と号する以前に「万寿堂」と号していたことになる。寛政十二年再刻当初の奥付には「万寿堂」と摺刷されているので、少なくとも寛政十二年にはまだ「万寿堂」を用いているようである。

『文林摘葉』は、寛政十二年九月に再刻本『文淵遺珠』と同時に割印をうけた書で、玉峰書の『文淵遺珠』の続編ともいえる本である。後表紙見返しの奥付は再刻本『文淵遺珠』の第二種奥付と同版のものが付されている（架蔵本）。再刻本『文淵遺珠』と『文林摘葉』は同時に割印されているのだが、もし『文林摘葉』が再刻本『文淵遺珠』の第二種の奥付が付された本しか存しないとしたら、この第二種が第一種に先立つ奥付である可能性もでてくる。いまのところ再刻本『文淵遺珠』第一種奥付と同版の奥付が付された『文林摘葉』が存するのではないかと考えているが、いまだ管見には入っていない。

『続文淵遺珠』は、『割印帳』によれば文化元年十二月廿三日の割印で寛政十三年仲春の申請になっている。申請してから三年後の割印ということになる。後表紙見返しに付された奥付は三種を確認している。第一種は再刻本『文淵遺珠』の奥付第一種と同版の奥付（岩坪充雄氏所蔵）、第二種は再刻本『文淵遺珠』の奥付第二種と同版の奥付（岩坪充雄氏所蔵）、第三種は広告の後に「文化二年乙丑夏開刻／京都 丸屋市兵衛／東都 万寿堂与市／須原屋茂兵衛」（岩坪充雄氏所蔵）とする奥付である。第三種の奥付は第二種とレイアウトが同一で本屋も同一なので一見、第二種を部分的に入木修整した版かと見紛うが、同一の部分はかぶせ彫りをして、別の版をおこしたものである。第一種と第二種の奥付は再刻本『文淵遺珠』の奥付を流用したのであろうが、第三種は文化元年に割印された後に『続文淵遺珠』用に作成した奥付であろう。とすれば文化元年割印以降に新たに作成され奥付に「万寿堂」と彫刻していることになる。ということは、屋号は後年まで「万寿堂」と「八

丈島屋」を併用しているのかもしれない。

このように見てくると、華陽が書肆として出版した本は沢田東江やその周辺の人物のものに限定されているといっていよい。華陽が東江に入門していたことも既に中野氏によって明らかにされている⁽⁴⁾。東条琴台『先哲叢談後編』の沢田東江の項に「東江壯年時。(中略)嘗入林公鳳谷之門。專攻程朱学。研究性理説。後又与木澶洲山県柳莊。講習漢魏古註。經義別構一格。蓋伝其学者。豊島由己 名幹字／子卿 芝汝嶺 名央字／子華 高華陽 名 慎／字正卿 等は也。」とあって、華陽が沢田東江の門人であったことが判明するのである。既述のように万壽堂の最初の出版物である東江著『文淵遺珠』は明和三年に上梓されている。明和三年といえば、山県大弑とその周辺の人々が処罰され、大弑と親交のあった東江も影響の少なからぬものがあつたとされる所謂明和事件に巻き込まれる直前のことである。中野氏前掲論文によれば、この時期東江は書、学問、戯作の執筆などをこなし、頭角をあらわしていたころで、江戸では既に名の知れた人物であつた。華陽は宝暦三年生まれと仮定すれば、江戸へ出た十一歳は宝暦十三年、仕官を志したがうまくゆかず、やむを得ず商家に奉公していたが、十八歳で独立し、商売をはじめたという。華陽十八歳は明和七年である。ということは明和三年『文淵遺珠』の出版は仕官の道を模索していた時期、ならびに奉公をしていた時期ということになる。

〈著作の出版〉

華陽が本屋として出版に携わった明和年間より遅く、自らの著述を蔵板で出版するようになるのは寛政年間ぐらいからと推定される。宝暦三年の出生と仮定すれば寛政年間、華陽は三十代半ばということになる。隠居してからの学問と考えることもできるが、家業をこなしながら学業に励んでいた可能性も残る。

華陽蔵板の出版物でまず注目されるのは、それらの書の本文後に付された「證拠学著述録」と題する自著出版広告である（図版2）。広告の冒頭に、

證拠学著述録 懐河 青信有誌

證とハ。神農氏ハ。伏羲氏を證となし。黄帝氏ハ。神農を證となし。尚書は。三墳を證となし。孔夫子ハ詩書易等を證となす。義理を用て。学派乃題目とす。且此目録に。載する所の書。いまだ刻全備せずといへとも。同志の徒。学派の大抵を窺ふの一助にならんと。是に記す而已。

孝經證話	女護島子著	五聲音釋證	詩經の音と五聲に分け、音韻の便と女護島子著、和氣氏の序	尚書證解	汝嶺子の指所と揚て訓と附け、爾雅と證と取く解を女護島子著	古三墳讀本	序文并訓点附冊、女護島子著	證とハ神農氏ハ伏羲氏と證とあり、黃帝氏ハ神農氏と證とあり、尚書ハ三墳と證とあり、孔夫子ハ詩書易等と證とあり、義理と用く、學子派乃題目とを、且此目錄ハ載を所の書、いふと刻全備りといへども、同志の徒學派の大抵と窺ふの一助なりとんと是ハ記を而已	
孝經證	女護島子著、華人の序文と載	易學簡理證	先後天八卦と陰陽と、傳と義と證と女護島子著、秦堂子傳、野子錄	四始考證	詩大序ハ載四始とあり、題とて感并し、大雅頌の歌とが那文、いめて、野子常子著、女護島子の序	古三墳證	女護島子の著、谷氏校正、秦堂子、野子子の序	證拠學著述錄	懷河 青信有誌

図版2 「證拠學著述錄」冒頭（『詩經人物證』（中野三敏氏所蔵）付載）

として、以下二段組で七十四の書目と簡単な広告を三丁にわたって掲載している。華陽は自らの学問を「證拠学」と称して夥しい数の著述を出版あるいは出版を計画しているのである。この広告のなかには華陽の著述でないものも含まれている。華陽以外の著者として芝田汝嶺、星野子常、鳳洲子、高為榮といった名が認められる。このうち「高為榮」は、墓碑銘から華陽の先考であることが判明する。「證拠学目録」には『家童訓』の著者として記載されており、広告に「職業を家童に。教たるを記す。」と掲載する書である。この他、『綜嶼俚語』は広告に、「我島のこと民間

に推り聞伝を記す。」と掲載する書で、この書もやはり證拠学に関連する本ではない。既述した万寿堂上梓の『統文淵遺珠』等も付載されているが、それらを除いた七十一点は広告文の内容からも「證拠学」の著述とみなされる書である。このうちの広告をいくつか挙げてみると、

「尚書證解」 汝嶺子の指所を揚て、訓を付け、爾雅を證に取て解す。女護島子著。

「經註隔義録」 諸書の疑を集て、疑惑を解便とす。女護島子の指所を用て、青信有集。

「古字彙證」 秦以上の用語を集挙て、字ごとに解をなし、字義字法の便となさんとして、汝嶺子、女護島子、執筆を企末果さず。

これら広告の内容を勘案するに、華陽は芝田汝嶺、星野子常等とともに、經書を考究する方法として小学の重要性に着眼し、その仕事に共同で取り組んでいたようである。

芝田汝嶺は名は央、字は子華、通称は清八郎で、沢田東江の門人であり、華陽とは兄弟弟子である。天保三年版『続諸家人物志』等に經史に該通し、博聞を以て知られたとされる人物である。

星野子常は生没年未詳、名は璞、字は子常、熊嶽と号した。伊勢の人であるというが、身分や経歴等不明の人物である。芝田汝嶺のように東江周辺の人物かとも考えられるが、考究の手懸かりを得ない。「證拠学著述録」には星野の著述として『四始考證』・『大学證』・『大学考證』が掲載されているが、『詩經四始考證』（国立国会図書館所蔵）と『大学證』（中野三敏氏・筑波大学付属図書館所蔵・都立中央図書館市村文庫所蔵）は管見に入っており、実際に出版されたことが確認できる。このうちの一本、筑波大学付属図書館所蔵『大学證』には、後表紙見返しに「寛政三辛亥五月／日本橋通一町目／須原屋茂兵衛」の奥付が付されている。この年記を信じれば華陽の学業グループの出版としては早期の出版といえる書である。

華陽の学業グループの一員としていま一人の人物が「證拠学著述録」の下部に「懷河 □青信有誌」と記されている人物である。「信有誌」と記述されていることから、各書目の広告はこの人物が執筆したと考えられる。上記の『經註隔義録』の広告には「青信有集」と記載されており、青信有が編集した書であることが明らかである。「青」は青木・青柳等、青が冒頭につく苗字の略称で、名が信有という人物と考えられるが、この人物については他に手懸かりを得ない。しかし、「證拠学著述録」を作成し、未刊の書も含めておのおの書を簡潔に紹介する広告をものしているということは、「證拠学」の著述が企画される段階で華陽の学業のグループに参加している人物と考えて誤りあるまい。東北大学付属図書館狩野文庫所蔵『老子道德經』には、通常の「證拠学著述録」とは異版の広告が本文後に付載されていて、『經註隔義録』の広告に「懷河青信有集 此書ハ經書ハ經語ヲ以證セサレバ誤伝ヲ述即注解ノ齟齬スル所ヲアケ集学ヲ為ノ便ス」と付載されている。「懷河」は「證拠学著述録」の冒頭にも記載されているが、号であろうか。いずれにせよ「證拠学」と称した学業は、華陽と芝田汝嶺、星野子常、青信有の四人で営まれていたと考えられる。華陽著『好学讀話』下巻に「字彙の證引、秦以上の辞法を以て、集めかかり候所、文嶺子没、其後星野氏卒し候以来、其ままにて打捨置き、卒業不在、時々憾涙仕候得とも、以上著集大抵引揃へ、彼是隙取候内、星霜を歴、志願果不申

候。」という件があって、芝田等と共同の編集作業をしていたことを自らも語っている。

この「證拠学著述録」に挙げられた七十四の書目のうち、次の二十三点を確認している。

- 『尚書證』（静嘉堂文庫所蔵）享和三年秋八月上浣 自序
- 『古三墳』（中野三敏氏所蔵）寛政三年辛亥冬臘月 書肆嵩山房／小林新兵衛
- 『字義或問』（慶応義塾大学図書館所蔵）寛政十一年乙未 南紀 菊池叔成題，文化八年歳次辛未 録雪窩主人良識
- 『易学簡理證』（京都大学附属図書館所蔵）文化甲子三月望
- 『論語人物證』（国立国会図書館所蔵）文化二年季上完 高閔慎識
- 『尹文子』（東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）文化九壬申孟春 女護島識
- 『中庸證』（中野三敏氏・無窮会専門図書館平沼文庫所蔵）文化歳在壬申仲夏二十五日 藤原貞直序
- 『好学牘話』（中野三敏氏所蔵）文化九年初秋序，文化十年歳在西冬十一月序，甲戌の長月序，文化乙亥正月序
- 『詩経人物證』（無窮会専門図書館平沼文庫所蔵）癸酉之秋九月 横塘有則序
- 『性義録』（京都大学附属図書館・国立国会図書館所蔵）文化癸酉春王正月自序，文化戊寅春二月 関雪翁序
- 『改朔問考證』（国立国会図書館・京都大学附属図書館・慶応大学斯道文庫所蔵）序・刊記なし
- 『古三墳三易證』（中野三敏氏・東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）対嶽山人源崇序
- 『文辞考』（京都大学附属図書館・無窮会専門図書館神習文庫所蔵）文化十三年序
- 『孝経證話』（東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）文化丙子秋 佐々木重晃序
- 『詩経五声音釈証』（中野三敏氏所蔵）和氣行蔵序
- 『老子道德経解』（中野三敏氏・静嘉堂文庫，東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）稼圃序，池弼憲序
- 『老子道德経証仮字解』（都立中央図書館井上文庫所蔵）
- 『孝経證』（中野三敏氏所蔵）
- 『孝経證』異版（東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）序無年記

- 『三墳』（中野三敏氏所蔵）文化十四丁丑六月序
- 『論語證』（中野三敏氏所蔵）端本のため序刊，刊記等不詳
- 『尚書人物證』（無窮会専門図書館平沼文庫所蔵）和氣行蔵序
- 『作易象図』（東京国立博物館所蔵）未見

これら華陽著作の出版物は、華陽の本屋としての名称である「万寿堂与市」あるいは「八丈島屋与市」の名は、少なくとも奥付にはあらわれない。『割印帳』には『孝経證』と『三墳』が寛政三年十二月廿五日に同時に割印されていることが記載されている。『孝経證』は版元売出しが小林新八、『三墳』が小林新兵衛である。華陽が書肆として万寿堂あるいは八丈島屋与市という名で出版に携わった際に相合だったのは吉文字屋次郎兵衛あるいは須原屋茂兵衛、京都の丸屋市兵衛である。著述の出版はこれらの書肆とは別の書肆が携わっているようである。吉文字屋は東江著の『東江先生書話』を明和六年に出版しているし、須原屋茂兵衛は東江が法帖を多く出版したという須原屋嘉助の同族である。

このように、関係する本屋が売り出す本と蔵板の本屋で異なるのは、何を意味するのだろうか。華陽が出版に携わった東江関連の書は、華陽が江戸へ出てまだ奉公する以前の出版であることから、華陽の身の振り方を模索するひとつの試みとして、東江の紹介で出版に手を染めてみたということなのかもしれない。

ところで上記の華陽が出版した諸本の本文の後に付載された「證拠学」に七十一の書目が列挙されていると先述したが、実際は「證拠学著述録」は当初から七十一書目すべてが列挙されていたわけではなく、増補や修正等が少なからず行われており、次の五種類を確認することができる。

- ① 目録二丁，四十五書目掲載，「五声音釈證」・「中庸證」・「尚書人物證」・「本邦風雅集」・「詩経人物證」・「春秋史伝辞例」の広告の一部が未彫刻（黒く塗りつぶしたような版面）——『改朔問考證』（京都大学附属図書館所蔵）
- ② 目録二丁，四十五書目掲載，「五声音釈證」・「尚書人物証」・「詩経人物證」広告に入木修正。それぞれに「和氣氏の序」の文言が入る。「中庸證」・「本邦風雅集」・「春秋史伝辞例」広告の一部が未彫刻（黒く塗りつぶしたような版面）——『古三墳』・『詩経人物證』等
- ③ 目録二丁，四十五書目掲載，「中庸證」広告に入木修正。「堂上方の。御序文入。」の文言が入る——『好学讀話』・『性義録』等

- ④ 目録二丁，五十書目掲載——『古三墳三易證』等
- ⑤ 目録三丁，六十二書目掲載——『文辞考』
- ⑥ 目録三丁，七十四書目掲載——『中庸證』・『老子道德経解』

上記の広告は，著述を計画した段階，あるいは序文の執筆が成った時点で入木修整，あるいは新たに一丁分版をおこしたものであろう。管見に入った華陽著作の版本はそのほとんどがこの目録の①—③までの四十五書目のなかに入っている。その後増補した書名は計画をしたものの，後年芝田文嶺や星野子常が他界し，学業を共同で行っていた仲間に先立たれ，成就しなかったものと推測される。

ちなみに②の目録に掲載された『中庸證』の広告の「堂上方の序文」の執筆者は藤原貞直である。富小路家の養子となり，寛政五年従三位に任ぜられた人物で，『中庸證』の文化九年の序文には「刑部卿藤原貞直」と署名している。和歌・俳諧・書に秀で，加藤千蔭等とも親しくしていた。貞直はこの他，華陽に「證学堂」としたための額を恵与していたようである。『三墳』（中野三敏氏所蔵）や『易学簡理證』（京都大学附属図書館所蔵）の表紙見返しに，「富小路子真卿所賜之額字／證学堂／高閔慎謹縮／霞峰萬秋図」と書かれた扁額を唐子二人が両側から支える図が摺刷されている（図版3）。

この他にも華陽の著作本の序文や跋文は多彩な人々が書いており，「證拠学著述

録」の書目の広告にはそのことが宣伝されている。例えば幕府奥医師の桂川甫周や和歌山藩儒の菊池衡岳，上総一宮藩儒和気柳斎等が序文をものしている。これらの顔ぶれをみると，華陽の交遊は主に林家に集った人間であるという括り方ができるようである。これが東江を介して生じた交遊であることは想像に難くない。「證拠学」を共に標榜した仲間がそもそも東江門下の芝田汶嶺であることも既述の如くである。しかし，東江が林家に入門し，そこで修めた学問は程朱の学ならびに古註学であった。これに対して華陽の学問は，その標榜した「證拠学」とい



図版3 『古三墳三易證』（中野三敏氏所蔵）表紙見返し

う名称からも容易に察せられるように、明らかに清朝考証学を意識したものである。従って華陽は学統ということでは東江門とはいえないことになる。これは東江が林家に入門し、程朱の学・古註学を修めていた時期に華陽が東江に入門したものの、その直後に明和事件が起きたことによって東江が經学を離れ、書学の道へ方向転換したと無関係ではあるまい。師東江が經学から離れた後も華陽や汝嶺は林家に集う人々と交遊を保ち、その結果、学界が次第に清朝の学風の影響を受け、考証学が主流になっていった状況のもと、考証学を背景とした「證拠学」を唱えるまでに至ったのであろう。

宝暦頃から唐本の輸入が増大し、大名や聖堂以外の学者も唐本を入手できる場所となっていたことは、大庭脩氏の『唐船持渡り書の研究』に詳しいところである。大庭氏によれば、例えば宝暦三年十二月十日に八丈島に漂着した南京船が積んでいた書籍は、合計四百四十一種、四百九十五部、一千四百七十六套、一万二千八十二本と十帖に及ぶという。このことは寛延四年に『唐本類書考』が出版されることなどにもうかがわれる。『唐本類書考』は、その向荣堂主人の題言に、「近年明清ノ書長崎ニ航致スル部数直ニ洄沙ヲ計フルヨリ難シ」といい、「前ニ一色時棟ノ編メル類書目録アリトイヘドモ甚略疎ニシテ備ハラス」と、本書を出版した理由を述べている。文中の「蔵書目録」とは『二酉洞』のことである。一色時棟によって編纂された『二酉洞』は、元禄十二年に出版された書で、時棟が家塾で使用していた漢籍の叢書の目録である。寛延四年には市場に流通する漢籍が増加し、過去の『二酉洞』では、もはや事足りなくなっている様子が上記の題言からうかがえるのである。また、その供給された漢籍のなかに、清朝考証学の著作も少なくなかったことは、吉田篁墩の『近聞偶筆』巻四の、「清代諸儒、著述如林、各々名家、就中卓爾傑作、吾得三書焉、考据該備、援證探討、不遺余力、盧文弔之校汲冢周書是也、述而不作、信而好古、純乎漢唐之旧学、余蕭客之古經解鉤沈是也、涉遠履險、見聞詭異、議論精到、文章瞻新、椿園之西域見聞録是也。」という記述等にもうかがえるのであり、篁墩がいかに多くの清朝考証学の書に親しんでいたかを同書の他の箇所からも知ることが出来るのである。吉田篁墩といえば、篁墩は天明四年に「考拠学」を唱えたことを紹介したことがある⁽⁷⁾。清朝考証学の真髄を理解し、自らの学問の基盤とし、考証学に傾倒した学者の先駆けといえる人物である。篁墩は天明期に幕府医官多紀元孝・元徳父子の経営した医学学校躋寿館に出入りしている。躋寿館は寛政三年には官立の医学館となり、以後教科として經学も取り入れられるが、おそらくそれ以前から聖堂および林家の私塾と書籍をはじめとした様々な交流があろうことは想像

に難くない。華陽が林家私塾周辺の人々と交遊のあることは前述した如くである。具体的には篁墩あたりに少なからぬ影響を受けているのかもしれない。

最後に、華陽自身が自らの学問をどのように位置づけているのか確認しておこう。華陽著『好学読話』の下巻末に、以下のように述べている。

夫昔子貢曾子も商農なれば、妨なからんと決心はなせども、賤業身に有て、經学自註をつとむとは、国風の人、口憚べきに付て、他学の独註を除て、證古題目の学派に入る。今也註の上に評註、疏の上に精義を加へて、専ら和字解学の流行にて、末学の節なるに、證古学とはあたらず僻にして、読者も稀なるべく、^{ヒサク}嚮に遠きこと察思証ども、商人の著作に、口近き利を求る時ハ、教の本旨を廢す事を慎也。遠学不弁の嘲笑を得るとも好利嚮商の志を免れんとす。是賤業に有の寸志なり。後の我と同志なる者、出る時は、必ず其所を識ん。茲に載るに及はずして、陳すは父の教令を守しといふ。僻陋の愚意を述、右に挙、^{まぬか}学業も広き事を纔の同志を以て相涸し事故、一に錯綜屈兼、疎略の撰著と御^{つまる}遍る所は中華末学の糟粕を除て、本邦一風證古の正に帰す所あらば、碁将棋の彼の国に優る理に近からん。是以外聞を、御心謝有て、證古の補助あらば、儒道の綱貫、東方君子国の、掌中に伝る所あらん而已

要するに、商人の身で經学において自らの見解を展開するのは、憚られることであるので、他の学派の註を考究することはせず、証古（古を証する）を題目とする学派に入った。現在は既に註があるその上に評註を加え、疏がある上に精義を加えるというように、和字による解釈ばかりが流行している。いわば末学の時節である。この取るに足らない末学を除き、古を証することが出来れば儒学の本旨を明らかにするために役立ち、中国でも通用する学問となり得ようというのである。ここにはやはり程朱の学の解釈を恣意的な空論とみなし、清朝考証学の実証性に価値を見出す姿勢がある。しかし華陽等の「考拠学」は、清朝考証学の真骨頂である鑑別（資料批判）と校勘（本文批判）と考証（内容批判）という、三つの批判の上に考究する実事の解明とはほど遠いレベルのものであることは否めないのである。しかし、江戸後期の江戸において、「実学」が町人を中心に流行した現象を学界の一動向として考察する際、特筆すべき事例であることは確かであろう。

華陽の場合は清朝考証学の影響を受けて自らの学問の構想を形成していることは

確実である。しかし、近世後期、学問のみならず随筆等、様々な分野で巷間に隆盛を極めた「考証」という対象へのアプローチの方法は、必ずしも清朝考証学に拠っているわけではない。本格的な考証の仕事を残した狩谷棊斎の学問もおそらく方法の根源は清朝考証学ではない。またその「考証」の厳密性、科学としての信憑性も実に様々なレベルのものが存するにもかかわらず、この時期に「考証」に携わる人々を「考証学派」、その仕事を「考証学」として一括りにするきらいがあるが、その由来やレベルの多様性と、それらの「考証」が目指した成果の内実を考えれば、その当事者自身が「考証」という用語を使用している例もあることを考慮したとしても、当時巷間で用いられていた「実学」という名称でこれらの営みを表現するのが的を得ているように思われることを蛇足ながら述べておきたい。

注

1. 柏崎順子「立原翠軒の門人岡野庄五郎宛書簡」(『一橋論叢』第125巻第3号, 2001年, 日本評論社)
2. 畑銀鷄「南柯の夢」『日本随筆大成』第二期, 十巻所収
3. 柏崎順子「菅茶山と狩谷棊斎」(『広島歴史県立博物館紀要』第9号, 2007年3月)
4. 中野三敏「沢田東江」(『近世新崎人伝』昭和五十二年, 毎日新聞社)
5. 『赤沼掃墓叢書』(『日本人物情報大系』第55巻, 2000年, 皓星社)
6. 石塚豊芥子編, 鈴木裳三『街談文々集要』(1993年, 三一書房)
7. 柏崎順子「安永天明期の吉田篁墩 一」(『一橋論叢』第122巻第3号, 1999年, 日本評論社)